

自己研鑽としてのコミュニティ活動への参加報告

宇田川暢

情報通信技術支援室 情報基盤技術グループ

概要

令和 6 年度に「LMS（学習管理システム）運用の事例研究および技術研鑽」、および令和 7 年度に「情報セキュリティコミュニティ活動への参加」をテーマに「全学技術センター自発的技術研鑽助成プログラム」に応募し、採択された。これらの内容について報告する。

1 LMS 運用の事例研究および技術研鑽について

令和 6 年度は LMS の運用と活用についての情報収集をテーマとし、次のイベントに参加した。

1.1 MoodleMoot Japan 2025¹

MoodleMoot Japan はオープンソースの LMS である Moodle の運用や利用に関わる教職員、機能開発や構築・運用サービスを提供する企業などが参加している会議であり、日本ムードル協会²が年に一度開催している。令和 6 年度は京都市サテライトパークを会場として 2025 年 2 月に開催された。

本イベントに参加し、筆者が開発に携わった Moodle 用プラグインの発表と他の参加者の発表の聴講を行った。世間を賑わせている生成 AI が本イベントにおいても耳目を集めており、2024 年 10 月にリリースされた Moodle 4.5 から生成 AI 機能が導入されたことも相まって、関心が高い様子であった。

筆者らの発表内容も、小テストの各問題の採点結果と他の受講者の採点結果から、受講生間での相対的なフィードバックコメントを生成する試みをプラグインとして実装する[1]という生成 AI 機能を利用したものであった。発表時は開発が完了しておらず、コンセプトと進捗の報告に止まったが、フィードバックコメントの生成手法についての質問があった。

1.2 EduTech 春のワークショップ（九重）³

主に教育情報学について研究を行っている大学教員向けのワークショップが開催されたため参加した。熊本阿蘇の研修施設にて合宿形式で行われ、全 3 泊 4 日の日程のうち、初日を除く 3 日間参加した。

9 名が参加し、所属大学において LMS 運用を担当している教員が抱えている課題、学習結果の分析手法、今後の研究活動テーマなどについて紹介がそれぞれ行われ、その内容に対する議論が昼夜を問わず行われた。

日程的には MoodleMoot Japan 2025 の 3 週間ほど前であったが、こちらでも生成 AI の利用について様々なアイデアが話題に上がった。生成 AI を LMS などのシステムに組み込むというよりは、ChatGPT などを利用して講義の感想を自動仕分けするようなケースが主であった。

筆者からは理化学研究所[2]および長崎県立大学[3]で起こった LMS に関連するセキュリティインシデントについて、公開されている情報を基にした紹介と解説を行った。

¹ <https://moodlejapan.org/course/view.php?id=107>

² <https://moodlejapan.org/>

³ <https://www.ltc.kyutech.ac.jp/17448/>

2 情報セキュリティのコミュニティ活動への参加

令和7年度は情報セキュリティへの組織的な取り組みの情報収集をテーマとし、次のイベントに参加した。

2.1 情報セキュリティワークショップ in 越後湯沢⁴

主に日本各地の温泉地で開催されている情報セキュリティをテーマにしたイベントが5つ（越後湯沢、熱海、南紀白浜、道後、九州各地）存在し、それぞれ年に一度開催されている。そのうち、越後湯沢で開催された本イベントに参加し、情報収集を行った。2025年は10月10日～11日に開催され、公式発表では参加者は400名弱であった。

オンライン配信が行われず、対面のみで開催であったこともあり、内容の詳細についてはイベントの性質上記載できないが、公職にある人物からの公演の他、企業等でセキュリティ対策に関わっている担当者の生の声を聴くことができた。特にランサムウェア攻撃を受けて、事業に甚大な被害が出たケースでのインシデント対応については、通常表に出てこない内容のため貴重であった。

越後湯沢でのイベント参加について助成が得られたため、余裕分で九州において開催された同種のイベントである「九州サイバーセキュリティシンポジウム」に参加した。こちらについても開催地となった佐賀県内の企業において、どのような地域セキュリティコミュニティが形成されているかについての講演がされた。

2.2 塩尻サイバーセキュリティ勉強会⁵

長野県塩尻市で開催されている地域セキュリティコミュニティのイベントであり、地元のセキュリティ意識の啓発を目的としている。しかしながら、地元だけでなく首都圏から参加していると思われる参加者も多くみられた。参加した2025年8月開催の前回となる2025年2月開催の同イベントにはオンライン参加していたが、発表内容の目新しさよりも、地域の関係者での定期的な対面での情報交換の場として重視されているイベントであると感じた。

地元警察からはロマンス詐欺、投資詐欺、ニセ警察といった流行りのサイバー犯罪の手口について紹介があった。これらは一般的なサイバー攻撃よりも実生活により近く、認知件数も多いためだと推測する。また、対象者を限定せず誰にでも被害が起こりうることであり、という要素も有していることも理由と考える。

なお、名古屋市においても「名古屋情報セキュリティ勉強会⁶」として地域セキュリティコミュニティの主催する同種のイベントが存在しており、2025年8月に数年ぶりに開催されたと聞いている。

3 コミュニティ活動への参加を通して

特に地域セキュリティコミュニティの複数のイベントにおいて、直接対面での面識がある相手であれば、オンライン上でだけ繋がりがある相手と比べて信頼しやすく、自らが抱えている困難を相談できるという意見を耳にしている。また、LMSの運営などについてもやはり困難を抱えている場合は、同様であると想像に難くない。コミュニティへの参加は発表等での情報収集だけでなく、対面で直接会う機会を増やすことで単純接触効果を得て、コミュニティ内で他の参加者との信頼関係を築き、困難に直面した際に相談する相手を増やし、困難の解消にたどり着く可能性を高めるという意義を感じた。

筆者も業務上抱えている課題があり、それらの解決にコミュニティの力を借りたいと考えている。特に大学間の情報システム運用でどのようなことが可能であるか、また、どのようにすればコミュニティを構築することができるかについての模索を行っていききたい。

⁴ <https://yuzawa.anisec.jp/1570/>

⁵ <https://shiojiri-cyber.connpass.com/event/348118/>

⁶ <https://nagoyasec.connpass.com/event/359812/>

謝辞

本活動は名古屋大学全学技術センター自発的技術研鑽助成プログラム 2024-01、2025-02 の助成を受けたものです。

参考文献

- [1] 亀田真澄, et al, “生成 AI を用いた分析レポート生成支援 Moodle プラグインの開発と実装”, 日本 Moodle 協会全国大会（2025）発表論文集, 令和 7 年 9 月, P45-54
- [2] 理化学研究所, “学習管理システムからの情報流出の可能性について”, 理化学研究所, 2021 年, https://www.riken.jp/pr/news/2021/20211105_1/, 2026 年 3 月 25 日閲覧
- [3] 長崎県立大学, “本学が利用するサーバーへの不正アクセスに係る調査結果等について”, 長崎県立大学, 2023 年, <https://sun.ac.jp/files/libs/60013/202312071802503830.pdf>, 2026 年 3 月 25 日閲覧